

第六回 文政の波止浜騒動

今治の埋もれた、魅力ある歴史文化を紹介するコーナーです。第六回は、江戸時代後期に波止浜で起きた塩田争議を紹介し、騒動の背景を歴史散歩したいと思います。

●全国有数の塩田産地・波止浜

文政年間（一八一八〜二九）といえは、化政文化に代表される、江戸後期の華やくだ時代です。瀬戸内海では、江戸中期以降、各地で塩田開発が進み、国内塩の約九割はここで生産されていました。

伊予国最初の入浜塩田として天



波止浜湾と塩田（昭和初年頃の絵葉書）

和（な）三（さん）（一六八三）年に誕生した波止浜塩田は、最初三三軒・約三八町歩の規模でしたが、その後も増築を続けます。文政年間頃には、四〇軒・約六〇町歩の規模に達していました（一町歩＝約一ha）。

波止浜は、全国有数の塩田産地であったため、塩を買い求める船、塩田の釜焚燃料を売りにくる船で賑わいました。さらに、海上交通の要所の地の利を活かし、全国の市場から多くの商船が交易に訪れる、活気ある港町でもありました。

●塩田産地の特異性と騒動の発端

藩政時代、今治地域は松山藩領と今治藩領とに大きく分かれていました。その両藩域において、製塩業は主要な地場産業でありました。このため、港湾で荷役にたずさわる人々も含めれば、人口に占める製塩従事者の数は相当数いたと思われます。

塩田の作業は肉休労働で有名ですが、その象徴的存在が浜子と呼ばれる人々です。彼らは、労働時間や職の階級によつて報酬が決められ、銀で支給されてきました。そうした特殊な経済事情の中で、文政三（一八二〇）年春に騒動は起きます。

不景気が影響してか、浜主である塩田地主が給与の支出を減らそうと、浜子ら製塩従事者に対し、今治藩札で給与を支給したのが発端でした。波止浜は松山藩領のため、本来は松山藩札で支払うところを、当時、価値が松山の三分の二近くまで下落していた今治藩札を使用したのです。

●浜主の言い分と騒動の結末

浜主の言い分は以下のものでした。浜子の多くは、大島の津倉（吉海町）出身者なので、今治藩札で支給しても差し支えはないと。この経営者サイドの傲慢な態度に、浜子や被害に遭った関係者が不満をつのらせます。改善を迫るも、浜主の代表であった波止浜の森野屋伴蔵や高部村庄屋の渡部源吾らは態度を変えません。

そこで、釜焚燃料の石炭船船頭・武平らを中心に、これら浜主宅への襲撃が発生。暴動を起こした人々の数は、数百人に達したといえます。一方、これを鎮圧するため、藩は千数百人の兵で陸と海から波止浜を包囲。三五二人を逮捕し、野間郡の代官所があった大井村（大西町）へと連行します。

取り調べによつて、首謀者の武平らは松山城下の三津浜で千日の入牢。森野屋と庄屋の源吾は郡追放の刑となりました。この騒動のため、藩が費やした経費は米二〇七八俵だったようで、まさに波止浜始まって以来の一大事となりました。



波止浜港の石造灯明台（嘉永2【1849】年築造）